

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520217

研究課題名 (和文) ラシーヌ悲劇におけるセネカ作品とストア主義の影響

研究課題名 (英文) The Influence of Senecan Works and Stoicism on Racinian Tragedy

研究代表者

永盛 克也 (NAGAMORI KATSUYA)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10324716

研究成果の概要 (和文)：17 世紀の劇作家ラシーヌは少年期に受けた人文主義教育を通してセネカに体现されるストア主義に親しんだと考えられる。その悲劇作品において情念の抑制の困難あるいは不可能性を強調する点で、ラシーヌは同時代のストア主義批判の潮流に与しているといえるが、その一方で登場人物に付与されるきわめて反省的な自意識はセネカ悲劇の主人公のそれに比すべきものである。ラシーヌによるセネカの受容は意識的かつ批判的なものだったといえる。

研究成果の概要 (英文)：17th century French dramatist Jean Racine is supposed to have been familiar, through Humanistic education, with Neo-stoicism represented by Seneca. But Racine seems to adopt an anti-stoic attitude by stressing upon difficulty or impossibility of controlling passions. On the other hand, Racine endows his main characters with reflexive consciousness, comparable with that we find in Seneca's Heroes. We can say that Racine's reception of Seneca was conscious and critical.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：ヨーロッパ語系文学

科研費の分科・細目：

キーワード：フランス文学 悲劇 セネカ ラシーヌ ストア主義

## 1. 研究開始当初の背景

フランス17世紀の劇作家ラシーヌ (Jean Racine, 1639-1699) についての研究は1999年の没後300周年を契機として再度活性化されたといってよい。近年の出版物の中で特に重要なのは Georges Forestier パリ第4大学教授に

よるラシーヌの詩・演劇作品の批判校訂版 (Jean Racine, *Œuvres complètes*, t. I, théâtre-poésie, Gallimard, 1999) および同教授による浩瀚な伝記 (*Jean Racine*, Gallimard, 2006)、さらに1999年に行われた記念シンポジウムにおける講演と研究発表を収録した報告集

(*Jean Racine 1639-1699*, eds. Gilles Declercq et Michèle Rosellini, PUF, 2003) である。これらの成果を通して、ラシーヌ研究における「詩学」的観点の重要性が改めて確認されたといえるだろう。ここでいう「詩学」とはアリストテレス以来、作品の創作原理として規範的価値をもっていた文学理論の一分野であり、聴衆・読者に与える説得的かつ情動的効果を目的とする点でレトリック（弁論術、修辞学）と分かち難く結びついているものである。詩学とレトリックの見地に立つことにより、作品創作にあたって作家がどのような前提を有していたか、また、どのような意図をもち、どのような効果をねらい、どのような素材を用いて、どのような手順によって創作を進めていったか、という一連の問いを統一的視点から扱うことが可能になるといえるだろう。

ところで、これらの情念論の多くがストア主義の影響の下に執筆されたことは周知の事実であり、16～17世紀にかけて復活し、確固とした地位を築いた悲劇というジャンルが「恐れ」と「憐れみ」という情念の惹起と鎮静をその中心的課題とする以上、ストア主義と悲劇ジャンルの関係を問題として設定することは十分に正当化されるであろう。そして、その結節点に位置するのが哲学者であり悲劇作家でもあったセネカ (*Lucius Annaeus Seneca, -4-65*) である。古代ローマにおけるストア派哲学を代表する存在であったセネカの残した悲劇作品が、ある意味ではギリシャ悲劇以上にルネサンス劇に影響を与えている事実を考えると、ストア主義と悲劇の関係はより精緻な検証の対象となるべきであろう。シェイクスピア劇へのセネカの影響については英文学の分野で研究が進んでいるが、それに対して16～17世紀のフランス演劇におけるセネカ劇の影響は十分に研究されているとはいえない状況である。

ラシーヌとセネカの関係扱った唯一のモノグラフィーは Ronald W. Tobin, *Racine and Seneca* (University of North Carolina Press, 1971) であるが、この研究はセネカの劇作品および16～17世紀にかけてのセネカ劇の翻案とみなしうるフランスの劇作品の概観に書かれたほぼ半分が充てられており、セネカとの関連におけるラシーヌ悲劇の分析は部分的なものに留まっていると言わざるをえないし、ストア主義の思想への言及もほとんど見られない。他に参考となる研究としては、セネカ劇のルネサンス期における受容をテーマとしたシンポジウムの報告集 (*Les Tragédies de Sénèque et le théâtre de la Renaissance*, éd. Jean Jacquot, CNRS, 1964) の中に収められた論文 John

Lapp, « Racine est-il sénéquien? » がある。この論文は現在までのところ、ラシーヌ劇へのセネカの影響を扱った研究の中で最も透徹した視点を提供しているものである。

## 2. 研究の目的

(1) ストア主義受容の系譜 - 17世紀の悲劇作家としてのラシーヌの立場が16世紀の人文主義の延長線上にあること、そしてセネカを媒介として近代に受け継がれたストア主義思想の影響がラシーヌの作品にも伺えること、またラシーヌの態度は伝統の盲目的な踏襲ではなく、意識的な受容というべきものであることを、ラシーヌの受けた人文主義的教育（修辞学、文献注釈）や作家に間接的な影響を及ぼしたと思われる同時代の著作などに注意を払いながら、悲劇作品や序文の分析を通してテキストのレベルにおいて明らかにする。

(2) ストア主義の情念論と悲劇論の連関 - 情念の問題は哲学、修辞学（レトリック）、詩学に共通のものであったが、特に悲劇論に対してストア派の情念論が与えた影響を明らかにしたい。ただし、16～17世紀の情念論を網羅的に調査することはこの研究課題の枠を超えるものであるため、特にカタルシスの問題に焦点を絞り、主要な情念論の解釈を比較・検討する。

## 3. 研究の方法

(1) まず16世紀の人文主義によるストア主義の批判的受容の一例であるモンテーニュ『エッセー』（1580-1595年出版）中の一挿話（出典はセネカの『寛容論』）がコルネイユの悲劇『シンナ』（1642年出版）の源泉となっている点に着目し、16世紀末から17世紀前半にかけてのフランスにおけるストア主義の受容について調査する。具体的にはセネカの著作（特に寛容論）の出版・翻訳状況を調査し、それらが当時どのようなトポスを形成し、どのような形で言及されていたか、を明らかにする。必要な文献が日本で閲覧できない場合、フランス国立図書館よりマイクロフィルムを取り寄せるか、あるいは現地で調査を行う。

(2) その上で、特に悲劇ジャンルとの関連においてセネカの思想の受容例を研究する。コルネイユの作品とストア主義の関係についての研究としては既にモノグラフィー (Jacques Maurens, *La Tragédie sans tragique. Le néo-stoïcisme dans l'œuvre de Pierre Corneille*, A. Colin, 1966) が存在するので、こ

の研究書の成果を踏まえた上で、新たな視点を提示することを目指す。この著者が指摘するように、コルネイユ劇の主人公において意志が様々な情念を抑えて行動原理となっていく点にストア派哲学の反映をみることは十分に可能であるが、われわれとしては「寛容」が特に君主に対して要求される徳である点に着目したい。ストア派が理想とする為政者の像を悲劇の登場人物にすることで、内面の葛藤、情念の抑制と昇華を段階を追って、克明かつダイナミックな形で描くことが可能になり、セネカの思想がいわば血肉化された形で表現されているのではないかと。また、『シンナ』に込められたメッセージが同時代の為政者、枢機卿リシュリュエーに対して向けられたものではないか、という解釈も興味深いものであるが、この研究においてはあくまでもストア派の思想との関連に焦点をしばって考察する。

(3) 以上の点を踏まえた上で、ラシーヌがコルネイユの『シンナ』を念頭において構想したと考えられる『ブリタニキウス』(1670年出版)においてストア主義の思想がどのように体现され、また相対化されているかを詳しく分析することによって、17世紀後半においてストア主義の受容にどのような変化が生じたのか、その一端を明らかにすることを目指す。ラシーヌは『ブリタニキウス』において政治劇・陰謀劇の枠組みや劇作法に関してはコルネイユの作品を踏襲している一方で、ローマ的あるいはコルネイユ的な意味での英雄主義の非神話化を試みており、その非神話化の一環としてストア主義への間接的なしかし痛烈な批判がなされている、というのがわれわれの仮説である。劇中においてネロンの教師であったセネカが登場する代わりに、その役割は清廉潔白の士ビュリュスに託されるが、そのビュリュスはストア的君主の理想を語ることでネロンの心情に訴えようとして無残にも失敗する-ここでストア主義への批判的なスタンスは明らかであると思われる。具体的には、ラシーヌがストア的理想の表現をどのような典拠に負っているのか、という文献学的調査を進めるとともに、ストア的理想の失墜がラシーヌの同時代の言説とどのように関連しうるか、という問題についても考察を行う。

#### 4. 研究成果

本研究においては17世紀フランスの悲劇作家ラシーヌの文学的素養が16世紀の人文主義の延長線上にあることを前提とした上

で、特にセネカを媒介として近代ヨーロッパに受け継がれたストア主義思想の影響がラシーヌの劇作品にも伺えること、その一方で、ラシーヌの創作態度が伝統を盲目的に踏襲するものではなく、意識的かつ選択的受容というべきものであることを、作家自身の受けた人文主義的教育(修辞学、文献注釈)や作家に間接的な影響を及ぼしたと思われる同時代の著作などに注意を払いながら、悲劇作品や序文の分析を通してテキストのレベルにおいて明らかにした。以下、より具体的に成果を述べる。

(1) 16~17世紀のフランスにおけるストア主義の受容についての研究の一環として、セネカの著作(特に『寛容論』)の出版・翻訳状況についての文献資料調査を進め、フランス国立図書館の蔵書カタログを参考に主要な版の書誌情報をまとめた。

(2) 悲劇ジャンルとセネカ思想との関連、悲劇ジャンルへのストア主義の影響について、フランス国立図書館その他の蔵書カタログを参考に16~17世紀の文献を調査し、書誌情報をまとめた。

(3) 悲劇ジャンルとセネカ思想との関連について、コルネイユの悲劇『シンナ』(1642)がセネカの『寛容論』中の一挿話に想を得ている点に着目し、『寛容論』の受容について以下のような分析を行った(2007年12月の日仏国際シンポジウムで発表)。「『ブリタニキウス』(1670)におけるラシーヌの挑戦的意図は『シンナ』(皇帝の恩赦)とは逆の結末(皇帝による暗殺)を設定し、コルネイユの作品世界を反転させて提示することだったと考えられるが、そのために『寛容論』中においてセネカが皇帝ネロに宛てた言葉(死刑執行令への署名を躊躇した際のネロ自身の言葉)を劇中で巧妙に利用し、かつその教訓を無効なものとして提示したのである。

(4) ラシーヌが修学時代に読んだセネカ『寛容論』への「書き込み」を1649年出版の原本にあたって調査し、ピカール版(1952年)との異同を確認することができた。ラシーヌがポール・ロワイヤルで受けた人文主義教育によって培われた古典作品に対する深い理解が後年の創作活動の基盤になっている、というわれわれの説を補強する要素だと考える。なお、ポール・ロワイヤルにおける人文主義教育の意義については Georges Forestier, Jean Racine の書評の中で強調しておいた。また、古典作品の受容から創作につながるプロセスを論文「ラシーヌ悲劇の創作過程」(吉川・田口編『文学作品が生まれるとき-生成のフランス文学』所収、京都大学

学術出版会、2010年刊行予定)で論じた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Katsuya Nagamori, « Racine et Sénèque. L'échec d'un idéal stoïcien dans la tragédie racinienne », *XVII<sup>e</sup> siècle*, n° 248, 2010. (査読有)  
(印刷中)

② 永盛克也 「Georges Forestier, *Jean Racine*」  
『仏文研究』38号、2008年、147-152頁、  
査読有)

[学会発表] (計2件)

① Katsuya Nagamori, « Les étapes de composition de la tragédie racinienne »  
(Colloque franco-japonais « Comment naît une œuvre littéraire? », 2007年12月7日、関西日  
仏学館)

② 永盛克也 「ラシーヌ悲劇の創作過程 (試  
論)」(「フランス文学における総合的生成研  
究」研究集会、2007年4月7日、京都大学)

[図書] (計2件)

① 永盛克也、他、『文学作品が生まれるとき-  
生成のフランス文学』、京都大学学術出版会、  
2010年 (印刷中)

② Katsuya Nagamori, 他 *Comment naît une  
œuvre littéraire?*, Honoré Champion, 2010, p.  
25-38.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

永盛 克也 (NAGAMORI KATSUYA)

京都大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10324716

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし